

1613年(慶長18年)の夏、英国船として初めて来航したイギリス東インド会社貿易船クローヴ号船長ジョン・セーリスが、国王ジェームズ1世の国書を持って長崎に到着。徳川家康に謁見後、代わりに朱印状を貰い帰国してから400年がたったそう。今ひとつピンと来ないが、江戸文化などに詳しいロンドン大のT・スクリーチ教授ら英有識者が中心となって“政府間交流400周年”のイベント企画に奔走しているらしい。何ともありがたいことである。

実は日本は英国に対して大きな歴史的“借り”がある。日英同盟がそれだ。ハッキリ言って日露戦争に勝てたのは彼らのおかげと言って良い。確かに彼らは日本に対し一兵も出していない。が、当時のロシアは世界最大の陸軍国であり、世界第二の海軍国であった。にもかかわらず日本が勝利出来たのは、当時の英国が世界最大の海軍国で“7つの海”を支配しており、ロシア艦隊の位置を逐一日本に伝えた結果、日本海での迎撃を容易ならしめたことや、世界中の港湾施設も英国支配下にあるため、ロシアは燃料補給がままならず、洋上で、しかも手作業で石炭搬入作業をした結果、戦闘開始時にはすでに疲労きっていたこと、「三笠」など新鋭艦の引渡しや弾薬の供給に加え、ロシア同盟国であるドイツなどへの恫喝により彼らが日本の敵に回らなかったことなど枚挙に暇がない。そう。日本には“強い友人”がいたのだ。要するに強い友人がいないから太平洋戦争では惨敗した。聖書は言う。

「二人は一人よりもまさっている。二人が労苦すれば、良い報いがあるからだ。どちらかが倒れる時、一人がその仲間を起こす。倒れても起こす者のいない一人ぼっちの人はかわいそうだ。また、二人と一緒に寝ると暖かいが、ひとりでは、どうして暖かくなる。もし一人なら、打ち負かされても、二人なら立ち向かえる。三つ燃りの糸は簡単には切れない。」

伝道者の書4章9-12節

と。ところで2020年の東京五輪が決まったが、プレゼンを仕切ったのは12年ロンドン、16年リオデジャネイロ両大会の招致を成功させた英国人コンサルタントの男性というから驚いた。滝川クリステルの仕草や「おもてなし」も彼の演出と言う。日本は英国にまた借りが出来た。しかし不思議だ。旗に十字架を冠する英国と、なぜかキリストの復活を表すライジング

サンが今日もタッグを組むとは。ニッポンよ、最大の友人、キリストを得よ！

2013-10-24



写真：出撃する連合艦隊、「朝日」艦上より